

磐姫皇后歌四首の成立

森

斌

はじめに

仁徳天皇の皇后である磐姫（「記」石之日売、「紀」磐之媛）は、武内宿禰の孫で葛城襲津彦（「記」曾都毘古）の娘であると古事記・日本書紀に記されている。紀に登場する襲津彦は、四世紀後半から五世紀初頭に朝鮮へ進出した大和朝廷の重要な指導者であり、百濟記に見える「沙至比跪」と同一人であれば実在した可能性が強まり、磐姫も実在の皇妃であった、と考えてよいかも知れない。

さて、記・紀に登場する磐姫は、他に例を見出し得ない激しい嫉妬を見せること、また臣下の出で最初の皇后に立ったことでつとに名高い。その磐姫の詠んだとする歌が万葉集卷二の巻頭に置かれて

磐姫皇后の、天皇を思ひて作りませる御歌四首

君が行き日長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ

（八五）

右の一首の歌は、山上憶良の類聚歌林に載せたり。
かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死なましもの

（八六）

ありつつも君をば待たむ打ち靡くわが黒髪に霜の置くまでに

（八七）

秋の田の穂の上に霧らふ朝霞何処辺の方にわが恋ひ止まむ

（八八）

右の四首は、悩める恋情を歌う相聞で、天皇を追慕して葛藤する磐姫の姿を生々しく表現している。しかし、磐姫の実在に信憑性が認められても、五世紀にかかる短歌形式の歌が詠まれたと考え難く、澤瀉久孝博士が四首を伝誦歌であると説かれて以後、後世の仮託歌として、磐姫歌四首は理解されている。その仮託された時期については、近年少しく問題が投げかけられているが、小稿もその四首の成立した時期を探ってみたい。

ところで記・紀と万葉の磐姫像とは、嫉妬物語として記述された皇后の性格と悩める心情を示した性格とが異質なもののか、やはり一

貰したものとすべきか、その理解にも相違が生じて、成立論に影響を与えている。また、記と紀に於いても、磐姫像に違いを見出し得るところから、記・紀と万葉の像についてまずは考察してみたい。

一、記・紀と万葉

記と紀に於ける磐姫像は、その本質的な相違を嫉妬物語の結末部に見せている。

記では磐姫の物語が女鳥と速総別王の反逆事件で結末となる。その反逆事件に八田若郎女「紀」八田皇女が登場せず、若郎女が仁徳天皇の許から去っている。しかも、嫉妬深く激しい性格の女性として描かれてきた磐姫は、そこで有徳の天子にふさわしい聖后として登場する。すなわち、女鳥王の手に巻かれた玉を大楯連が自分の妻に与えたことで、皇后が連の行為を臣道にはずれたとして、大楯連を死刑に処したことは、もののは非をわきまえた立派な皇后の姿を伺わせる。

一方、紀の磐姫は、薨去するまで天皇と和解することなく、仁徳の皇后にふさわしいというより、嫉妬深くて強情な性格に終止する。ちなみに雌鳥皇女「記」女鳥王をめぐる反逆事件には、磐姫が既に薨じていて、八田皇女が皇后として登場している。そこでは記の磐姫の役割を八田皇女が果たし、偉大な天皇にふさわしい伴侶として皇女が描かれた。

さて、記と紀の磐姫像が何故にずれを見せたのであろうか。そもそも嫉妬深いという性格に共通したものを示すが、記で聖后として登場する磐姫の役割は、紀で八田皇女が負っている。とすれば相違

をもたらした根本に、八田皇女の処遇が考えられてよい。

記に描かれた八田皇女が身を引いたのは、天皇と和した磐姫がいたためである。もし八田皇女が立后するのであれば、磐姫が弊害となる。すなわち、有徳の天子にふさわしい皇女の立后には、天皇をいつまでも拒絶して和することなく薨去せざるを得ない磐姫でなければならぬ。紀の磐姫が激しく嫉妬して薨じているのは、八田皇女の立后に話を展開させるために必要であつたことになる。

その八田皇女が皇后に誕生する過程を、記では皇女を宮中に納れようとした仁徳天皇に磐姫が「遂に聴さじと謂して、故、黙して亦言したまはず」という態度であり、天皇が姫の不在中に皇女を召し上げたこと知ると、天皇のあらゆる和解を退け、「其れ皇女に副ひて后たらまく欲せじ」という皇后の位に固執して、天皇に会うことなく薨去して磐姫物語が終わり、続いて八田皇女の立后が記されている。やはり記と紀に於ける磐姫像の相違は、その物語の結末にある、と考えてよい。

ところで八田皇女がワニ氏の出自であり、磐姫が葛城氏の出身である。この両皇后の出身氏族が五世紀の朝廷に協力しているのであるが、吉井巖氏は特に葛城氏が難波王権に積極的な助力をしていることから、磐姫物語に難波王朝をめぐる各豪族の力関係を後宮の恋物語として語ろうとした意図、難波の始祖天皇が葛城氏出身の嫉妬深くても偉大な妃を治め、子孫の繁栄を築いた物語が原型であることを指摘された。また黒沢幸三博士は、磐姫の物語が葛城氏が伝えたものであり、八田皇女のそれがワニ氏の伝承であるとして、すでに出来かかっていた葛城氏の伝承した磐姫物語に、ワニ氏の八田皇女に関係した伝承話が新しく割り込んだのが記・紀のそれである

と述べている。⁽³⁾ これらを総合したとき、記が偉大な聖后としての像が見られた点に葛城氏の伝えた磐姫物語の原型には近いと考えられる。

では万葉の磐姫像とこれ迄考察した記・紀のそれとは如何なる関わりをもつのであろうか。少くとも記と紀を一括して比較することは、その両書に示された像の違いから適当な方法とならない。従って、より原型に近い伝承と考えられる記を中心に万葉と比較検討を試みることにしたい。

さて万葉と記紀とが矛盾する性格であるとして、考察する立場が考えられる。例えば、直木孝次郎氏は記紀の嫉妬する女性の典型とした像から万葉のそれを、光明皇后ということから藤原氏の関係者が修正したとして、記・紀と万葉の磐姫像とが重なりにくいとした。⁽⁴⁾ まさしく記と紀に共通する磐姫とは嫉妬物語に登場するにふさわしい激しい性格の持主である。しかも嫉妬に注目して記紀を一括した理解からは、嫉妬と異質な貞淑な妻の姿を万葉から導き出してしまふのかも知れない。

しかし、記に登場する磐姫は、激しく嫉妬する女性であると共に、有徳の天子にふさわしい聖后として女鳥王の話に見せている。

それは、まさしく貞淑で献身的な妻の姿である。嫉妬と愛とが表裏をなすことは、記の磐姫が語るところである。記と万葉とに必ずしも矛盾をきたす像の相違は認められない。むしろ、記と紀との相違が著しいと思われる。

さらに記と万葉とは英雄に通じる性格が認められる。万葉集の姫歌にある「高山の磐根し枕きて死なましものを」(八六、「黒髪に霜の置くまでに」(八七)という言葉は、すさまじい程の愛を告白

している。このすさまじさは、記に描かれた偉大な皇后という英雄像に結びつき、万葉もヒロイン磐姫を誕生させることになる。しかも、八七番歌で白髪になる迄も待とうと歌っているが、雄略天皇と赤猪子の話を思い浮べさせ、悲劇に終わる結末への連想ということになれば、記と万葉とは結びつくことになる。すなわち、赤猪子はその節操にもかかわらず報いられず、又紀の磐姫も恋慕しながら死んでいて、それぞれ悲劇と考えられる。

以上述べてきた様に共通した像を認め得るのであるが、万葉にはやはり独自のものがある。それは、記紀が見せる激しいが類型的な女性心理に対して、万葉が愛に基づき悶々と堪え忍ぶ女性の葛藤を表現していることである。この悩める心情を多面的に、しかも屈折させて詠んでいる心理とは、個人のそれである。

すなわち、万葉の磐姫とは人間としての葛藤であり、記・紀に見られる集団的、政治的なものと異質と言ってよい。その万葉の独自性は、連作によって可能になったと思われる。次節では、四首連作について考察を深めたい。それは四首で一つのまとまりを示す心理描写の構成に注目するためである。

一、四行詩の達成

磐姫歌群が四首でまとまりを示し、さらに絶句形式に四首構成を学ぶとしたのは、山田孝雄博士に説かれたのが最初である。⁽⁵⁾ その起承転結という展開に適合内容が四首の構成にあるかといえ、転にあたる第三首に少しく問題は残りそうである。しかし、漢詩の絶句に準拠する構成は否定出来ない。しかも、人間心理の屈折を見事な

四首構成で描いていて、完結した内容がある。

さて、起にあたる第一首は、帰らない夫を迎えに行くべきか、いや待つべきかという躊躇いが歌われている。第二首は、第一首に示された決め難い二つの方法から、迎えに行く方途が選ばれて詠まれる。下三句が「高山の磐根し枕きて死なましものを」と歌われていて、この迎えに行く方途も問題の解決に至らず、「まし」という実現しそうな感情が込められたことは、死を恋う気持へ転換させる。この下三句は、挽歌を思わせるもので、死の連想が折口信夫博士に第一首の第三句「山たづね」を奥山などへ魂こいに出かけたことと理解させている。この「魂ごひ」という特殊な内容で説明せず、相聞歌に見られる挽歌的な発想が基になった歌として処理された青木生子氏は、軽郎女の死出の行為を背後に偲ばせている、と指摘した。⁽⁷⁾

允恭記には、第一首八五番の原型と考えられる軽郎女が詠んだ歌謡に、

かれ後にまた恋慕ひかねて、追い往でましし時に、歌ひたまひしく、

君が行き日長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじここに山たづと云へるは今の造木なり

とあって、万葉歌と異なり「待つには待たじ」として迎えに行きながら、大郎女が都での生活に期待を込めて太子を伊予へ追いかけ、にもかかわらず郎女と太子とが一緒に自ら死んでしまう点に、青木氏の考察も生まれるのであろう。

挽歌的な発想を伴うことが第一首と第二首との結びつけをさらに強固にするが、第三首では第二首で選ばれた迎えに行く決意が何ら問題を解決せず、むしろ虚しさが暗示される結果、残るもう一つの方途であった「待ち」が歌われることになる。そこには「黒髪に霜の置くまでに」とあって、待つという消極的な内容であるにもかかわらず、迫力ある態度になっている。この片くなと思える決意は、前節でも触れた雄略天皇と赤猪子の話を例にしたとき、何ら恋情を解放する手段にならないことを知る。記に「今日に至るまでに、八十歳経たり」と赤猪子が述べると、「なほ志を守り命を待ちて、徒に盛りの年を過しつること、これいと愛悲し」と天皇が同情を示しているが、結末はかく厳しく節操を守っても悲しい別れで終わっている。磐姫の如く二つの方途のいずれにも徹しきれないのであれば、なおのこと激しく苦悶せざるを得なくなるのではなからうか。そして、追慕の情がますます増加して第四首に歌われた嘆きつつ待つしかないという結びの切ない心情に、磐姫は至ってしまうのである。

第一首の八五番歌に始まり、第四首の八八番歌に収斂される構成とは、それぞれの歌が互に緊密な繋がりをもって展開した連作の如きまとまりを示す。(一)女心の躊躇い、(二)死をも恋い、(三)また待つことの虚しさ、(四)切ない嘆き、という多面にわたる恋情の展開は、まさしく完結したまとまりを見せていて、四行詩と呼称してよい。また「死なまし」(八六)「黒髪に霜の置くまで」(八七)などという表現は、愛情ゆえに片くなまでの嫉妬を見せた記・紀の磐姫像を彷彿させ、加えて万葉の貞淑な有徳の天皇にふさわしい皇后に昇華させる要因である。

ところで万葉集中に四首でまとまりを示す歌群は二八例程が数え

られる。しかし、個人がある主題に添って連作した歌群と考えるものは、次の十七例である。

人麻呂	四六〇、四九六〇（二例）
弓削皇子	一一九〇
角麻呂	二九二〇
河辺宮人	四三四〇
大伴百代	五五九〇
坂上大嬢	五八一〇
田村大嬢	七五六〇
追和梅歌	八四九〇
書殿餞酒日倭歌	八七六〇
赤人	一四二四〇
家持	一五六六〇
人麻呂歌集	一七九六〇、三一二七〇（二例）
福麻呂	四〇三二〇
池主	四一二八〇

右に示した例からも人麻呂以後に四首連作、四首構成が始まることを知る。さらに四行詩と呼称できる歌群ということになれば、絶句形式に学ぶという完結性が加味され、それは人麻呂（四六〇）、弓削皇子（一一九〇）、坂上郎女（五二五〇）、そして卷十二の人麻呂歌集歌（三一二七〇）の四例になり、磐姫歌群を加えても五例に過ぎない。その五例中で構成の趣に類似を見せているのが、弓削皇子と磐姫の歌群である。

弓削皇子、紀皇女を思ふ四首

吉野川行く瀬を早みしましくも淀むむことなくありこせぬか
も（一一九）

我妹子に恋ひつつあらずは秋萩の咲きて散りぬる花にあらましを（一二〇）

夕さらば潮満ち来なむ住吉の浅香の浦に玉藻刈りてな（一二一）

大舟の泊つる泊まりのたゆたひに物思ひ瘦せぬ人の児ゆるに（一二二）

右の弓削皇子歌四首では、第二首が磐姫歌群の第二首と「……ずは……まし」という構文の一致を見せ、類想歌らしい趣を見せる。しかも、第二首が第一首に歌われた末永くと願う心情を否定して、第三首にその打消した心情を展開させる役割を負うのは、磐姫歌の第二首と同一である。さらに紀皇女を恋う尽きせぬ心情のはてが第四首に収斂されていて、磐姫歌四首と同趣な構成を探することは認められる。異質な点としては、第一首に選択するべき方途が示されていないことであろう。

さて、弓削皇子歌四首は、類型と個性とが交錯していて伝承歌の性格も含まれているが、一二一番などで景に叙情を託する皇子の生地が表われていて実作として理解される。ちなみに皇子の薨去は文武三年のことである。従って、この引用した四行詩は、成立が常識的に考えて文武三年以前ということになる。

ところで、和歌四首の構成を分析した渡瀬昌忠氏は、「流下型の対応」と「波紋型の対応」という名称を与えて考察している。その

根底をなすのは、四人で構成した場ということであるが、「後追和梅歌四首」(八四九)なども波紋型の対応をもつとされ、四人構成の座が近江朝にすでに成立していたとしている。しかし、磐姫歌と弓削皇子歌を四行詩としたのは、「座」というより、むしろ異質な宮みから派生して来た要因を考えるからである。もちろん歌の記録がその創作された場、伝誦された過程と無縁なものであり得ない。但し、四行詩の根底には、もの語る意識がある。

すなわち、ある個人の持続した心情を歌の四首構成で表現したり、第三者によって仮託されて歌われることは、構成により叙事が加わり、歌日記・歌物語の性格が強められる。その意味では、磐姫歌四首は歌物語の起源的な持続した心情の展開を左注などによらないで、四首構成で試みた歌群ということになる。さらに絶句形式に学ぶのは、四首構成の完結性を求めた結果であろう。

さて、歌物語の起源と呼ぶにふさわしい磐姫歌四首は、いつ頃伝誦歌が仮託されて完成したのであろうか。四人構成の場が近江朝に始まり、人麻呂以後に四行詩が始まっているが、下限をどこにするかは、考察者の立場によってずれを見せている。

三、成立時期について

磐姫歌四首の成立した時期に触れた論は、澤瀉久孝、中西進、伊藤博諸博士等の持統・文武朝説と、直木孝次郎、稲岡耕次両氏の元明・元正朝以後説とに区分して整理できる。もちろん個々の説には、それぞれの根拠と微妙な時期のずれを見せている。

澤瀉久孝博士は、磐姫歌を伝誦されたものと規定し、さらにその

成立を藤原朝前後に皇后に仮託されて伝えられた連作とした。⁽¹⁰⁾ 中西博士は、額田王の活躍した近江朝の後宮で磐姫の物語がもてはやされ、加えて人麻呂以後に連作(四行詩)が成立することから、持統・文武朝にこの歌群が完成したとした。伊藤博士は、連作の享受された場が持統後宮と考え、八五番の左注に記された類聚歌林と前節で引用した弓削皇子歌四首の存在から持統朝に仮託されたと想定した。⁽¹²⁾

一方、直木氏は、万葉の磐姫像が記紀のそれと異質であるとして、光明立后という政治的な背景が姫像を容れさせたと考え、和銅末から養老の間に四首の連作が成立したとして、連作にまとめた人物に山上憶良を推定している。⁽¹³⁾ 稲岡氏は、磐姫像が直木氏の言う容れたと見做さず、記紀の内面を補完する力点の移動として理解し、類聚歌林の成立したとする養老五年以後に連作が成立した、と判断している。⁽¹⁴⁾ 但し、稲岡氏は直木氏説を承けつつ論を展開させているが、連作の完成者に特定の人物を想定していない。

かく成立時期に大きなずれを投じた最大の原因には、類聚歌林の存在がある。端的にいえば、歌林の成立したと推定される養老五年を規準にして以前か、以後かということが連作の成立論の根拠になっている。その問題となる歌林とは、八五番の左注に記載された条を指す。

ちなみに伊藤博士は、歌林を引用するときが異説に関係する場合に限定され、四首一体の作品であるから、八五番を磐姫歌として、残る三首が歌林に収められていなかったことが左注の記述の意味である、と解釈した。⁽¹⁵⁾ ところが稲岡氏は、山田孝雄博士が示した説に共鳴され、八五番が歌林に載せられた歌で、残る三首が歌林に記載

されていなかったから、八五番の左注が付けられた、と理解した。⁽¹⁷⁾

かく八五番の左注の解釈に対立したものを踏まえて、成立がそれぞれ語られている。しかし、八五番歌が歌林にも収められた歌であるから注されたと解するのは、認められるのであろうか。卷一、二で歌林が引用されるのは、作者・本文などが異なる場合である。八五番歌が歌林にも磐姫歌として収めるという同説の引用として例外となるのであろうか。例えば九〇番の左注には、「右一首の歌は、古事記と類聚歌林と説ふ所同じくあらず、歌主もまた異なり」として、日本書紀をかなり詳しく参照している。この九〇番の左注は、古事記（異本古事記とするべきか）と歌林とで説が異なるために付された。同じ説であれば歌林が引用されるべくもなかったであろう。その点を考慮したとき、稲岡氏よりも伊藤博士の八五番左注の解釈が正しいと思うのである。

すなわち八五番の左注とは、万葉が四首一体として磐姫歌としていたのに対し、歌林が八五番のみを磐姫歌として収めていたために付された、と理解する。従って、類聚歌林の成立が養老五年とすれば、それ以前に四首が一体としてまとまっていたことになる。また、記・紀と万葉の磐姫像が相違するという考えについては、四行詩の達成により多面的に悩める恋情を表現し、持続した内面を描いたのであって、変容、力点の移動を政治的背景、氏族伝承ということで説明することに躊躇が残る。むしろ、記と紀の像が相違するのは、かくいふ政治的な背景の力があつたとするべきであろう。但し、万葉の磐姫像とは、人間としての屈折した心情を多面的に描き、四行詩として完結した独自のものである、と理解するに止めた。

ところで前節では弓削皇子歌四首（一一九―一二二）を実作であ

るとして、薨去した文武三年以前に成立したことを述べた。もし磐姫歌群に皇子が学ぶ構成を探る連作を試みたのであれば、姫歌群の成立した下限がさらに限定される。

そもそも絶句形式に学ぶ構成を探る歌群は、五例に過ぎない。さらに磐姫歌群と構成の趣に類似点を見出されるのは、弓削皇子歌四首である。磐姫歌四首の構成が見事であり、四行詩として完成された姿も具わっている。この構成を弓削皇子が初めて創造したとするより、皇子が磐姫歌の構成に学んだとするべきでなからうか。

弓削皇子は八首が万葉に納められた歌人で、景に叙情を託する歌風が新しいものである。しかし、新風の歌をもつることと、構成に綾をなす構想力とは同次元で比較できない。天武天皇の皇子女が素人的な性格をもつ歌人であつたことを考え合わせて、既に存在していた磐姫歌群に弓削皇子が学んだと考えられる。従って、弓削皇子歌四首があることによって、磐姫歌四首は文武三年前に存在していたことになる。

さて少しく弓削皇子に触れたい問題がある。それは人麻呂が皇子の代作を試みている可能性のあるためである。中西博士は、卷三に収められた皇子が吉野に行かれた時に作歌した二四二番と人麻呂歌集に記載されていた二四四番との比較から、代作説を主張されている。⁽¹⁸⁾とすれば、紀皇女を思う四首も伝承歌らしい性格を全く否定し切れない点もあって、磐姫歌群の仮託者に人麻呂を想定する伊藤博士説は、当然予想されてよい推定になる。⁽¹⁹⁾

また卷二の成立についても、磐姫歌群の成立を考えると、考慮することは当然である。すなわち、磐姫歌が増補された部分に含まれる可能性があり、弓削皇子歌四首も同様であることによる。

卷二の題詞は、中西博士が原集団と呼ぶ「……時……作歌」と増補団とも呼ぶ「……作歌」の二形式に分けられる。⁽²⁰⁾この題詞形式による分類では、磐姫・弓削皇子歌共に増補部に含まれる。また、伊藤博士は卷二の形成について、弓削皇子歌四首（一一九～一二二）、長皇子歌（一三〇）、弓削皇子の薨去を傷む歌（二〇四～二〇六）を採り上げ、志貴皇子と同母兄弟の長・弓削両皇子とに関する歌が増補されたとして、卷一・二に追補を行った編纂者と卷三・四の原集団を編集した人物が同一人であると考え、これらの資料が編集された時期に神亀の初期を推定している。従って卷二の形成にも十分考慮して、磐姫歌の成立が述べられなければならない。

しかし、増補資料が神亀に完成して万葉に組み込まれたとして、磐姫に四首が仮託された時期と文献にまとめられた時期とは、ずれを見せることも考えられる。種々の問題を含みものであるが、弓削皇子が紀皇女を思つて詠んだ四首を実作と考え、また類聚歌林の成立する以前に完成していたところから、持統朝以後の文武三年迄には、磐姫歌が四行詩として存在していた、と推定する。

結 び

以上磐姫皇后の歌四首を考察して来た。記と紀の皇后像が異質なものと含まれ、嫉妬物語としては一括できない性格が認められた。一方、万葉の磐姫像とは記に描かれた聖后にふさわしい心情を、閑々と堪え忍ぶ葛藤で多面的に表現していて、貞淑な妻の姿を彷彿させるものであった。しかも、絶句に学ぶ構成は、個人的な心情表現に迄昇華させていた。四行詩では、磐姫伝承に支えられて歌物語

の起源ともいふべき持続した内面を描く叙事と物語の完結を示す性格とが達成されていたのである。

かく後世の文学形態にも展開する内容を含みもつ磐姫歌の成立時期については、光明立后による再評価がなされた、或は記・紀に描かれた皇后像を補完するなどの理由で持統・文武朝に仮託成立した説に疑問が生じていた。しかし、磐姫像が記・紀と異質なものとして比較するのではなく、万葉の独自性が四行詩として達成されているのであり、それは再評価・補完ということに結びつかない性格である。

従って、拙論では、類聚歌林と弓削皇子歌四首の存在から、持統朝から文武三年迄に磐姫歌四首が四行詩として仮託されて完成していたことを確認したのである。

〔注〕

- (1) 「伝誦歌の成立」『万葉の作品と時代』所収
- (2) 「イハノヒメの物語」『関西大学国文学』52号
- (3) 「ワニ氏の伝承」『日本古代の伝承文学の研究』所収
- (4) 「磐之媛皇后と光明皇后」『赤松俊秀教授退官記念国史論集』所収
- (5) 『万葉集講義卷二』二四～二五頁
- (6) 「恋及び恋歌」『折口信夫全集第八卷』所収
- (7) 「相聞歌における『死』——磐姫皇后八六番をめぐる——」『文芸研究』50号
- (8) 拙論「弓削皇子私論——紀皇女を思ふ御歌四首を中心に——」『広島女学院大学論集』第29集で触れている。

- (9) 「四人構成の場―U字型の座順―」(『万葉集研究第五集』所収)
- (10) 注1に同じ。
- (11) 「伝誦の作家たち」(『万葉集の比較文学的研究』所収)
- (12) 「磐姫皇后歌の場合」(『万葉集の構造と成立上』所収)
- (13) 注4に同じ。
- (14) 「磐姫皇后歌群の新しさ」(『人文科学紀要』第60号)
- (15) 注11に同じ。
- (16) 注5に同じ。一八頁
- (17) 注14に同じ。
- (18) 『万葉集(一)』(講談社文庫)二四四番歌脚注
- (19) 「人麻呂と宮廷ロマン」(『万葉集の歌と作品上』所収)
- (20) 「感愛の誕生―万葉集卷二の形成―」(『国語国文』第35巻4号)
- (21) 『万葉集二』(新潮古典集成)三九七―四〇一頁